第８回

宝塚混声合唱団リサイタル

１９９６年１０月２６日（土）
開演　６：００P. M.
ベガ・ホール

後援：　宝塚市、宝塚市教育委員会、宝塚市文化振興財団
宝塚合唱連盟、宝塚ロータリークラブ

プログラム

詩編　　メンデルスゾーン作曲

Der.42Psalm

指揮　大森地塩
ピアノ　國井美佐
ソプラノ　門田敦子

ロジェ・ワグナー合唱曲集より

ローレライ
春の日の花と輝く
アフトン川の流れ
アニー・ローリー

指揮　大森地塩
ピアノ　村田朋子
テナー　草野正弘

休憩

レクイエム　　三木　稔作曲

指揮　大森地塩
ピアノ　山本京子
テナー　中川裕文
バリトン　井上喜光

ごあいさつ

本日は、私ども宝塚混声合唱団の音楽会へお越し頂きまして誠にありがとうございます。

今回は、メインステージに三木稔作曲のレクイエムを歌います。私どもにとって、レクイエムといえばフォーレやモーツアルトなど西洋の曲がまず思い浮かびますが、そのような西洋音楽の世界と少なからず異なる曲想のレクイエムを歌うことは、たいへん刺激的な体験でありました。曲は技術的にも難かしく、このため臨時練習も何回となく重ねました。また、9月には三木稔先生をお招きして直接ご指導いただきました。言葉の力が直截に胸に迫ってくるこの鎮魂歌を、先の震災で彼岸へ渡った多くの魂のため、また、三木先生のお言葉を借りれば、「現代の恐るべき数々の殺戮によって、天寿を全うせず昇天した魂」に捧げたいと存じます。

さて、宝塚混声は、ながらく活動を支えていた市民音楽祭が終息した今、自らを鼓舞する新たな目標を持つべく模索を続けています。顧みますと、私どもが好きな歌を歌えるのも、ご来場の皆様方を始め日頃から私どもを支えて下さる数多くの方々のご好意の賜物です。歌わせていただいているとの感謝のこころを確かめ直すことから新しい道が始まる、ここにこそ私どもの目指すべき方向があるのではないか、との朧気な予感を覚えます。音楽を愛する皆様方に、私どもの今後の進み方を暖かく見守っていただきたいと存じます。

平成８年１０月　　宝塚混声合唱団

曲目解説

詩編　４２　　メンデルスゾーン作曲

Der.42Psalm

バッハやヘンデルの音楽に深く学び、その上演や編曲で一世紀前の音楽を当時の人に再認識させたメンデルスゾーン（１８０９－４７）は自身もすぐれた宗教声楽曲を幾つも残した。このカンタータ（１８３７－３８）も人間の苦悩と神の救いを多彩な美しさで描いている。

曲は旧約聖書詩篇４２冒頭の「鹿が清水を求めて叫ぶように……」という印象深い歌いだし（アルト）で始まる。次の曲から独唱が加わり、神への渇望、嘆き、そして喜びを歌いあげ聞く者の心を打つ。

「４．合唱」の最初（男声）の「何故悲しむのか……神を待ち望め！」はこの詩篇歌詞の大きな山で「７．終曲の合唱」の始めに再び現われる。そしてテナーの「ほめたたよ、主イスラエルの神を……」が続く。

それは各声部で繰り返され、合唱はフレームが大きく華やかで力強い、時にヘンデルを思わせるような展開を見せ、終わりに向かって高揚して行く。神へのゆるぎない信頼と確信を示しながら。

（B．長尾）

Wie der Hirsch schreit nach frischem Wasser,
so schreit meine Seele, Gott, zu dir.
Meine Seele dürstet nach Gott, nach dem
lebendigen Gotte !
Wann werde ich dahin kommen, daß ich
Gottes Angesicht schaue ?
Meine Tränen sind meine Speise Tag
und Nacht,weil man Täglich zu mir saget,
Wo ist nun dein Gott ?
Wenn ich dess inne werde, so schütte
ich mein Herz aus bei mir selbst:
Denn ich wollte gern hingehen mit dem Haufen
und mit ihnen wallen zum Hause Gottes,
mit Frohlokken unt mid Danken
unter dem Haufen, die da feiern.
Was betrübst du dich, meine Seel,
und bist so unruhig in mir ?
Harre auf Gott ! Denn ich werde ihm noch
danken, daß er mir hilft mit seinem Angesicht.
Mein Gott, betrübt ist meine Seele in mir,
darum gedenke ich an dich !
Deine Fluten vauschen daher, daß hier eine

涸れた谷に鹿が水を求めるように
神よ、わたしの魂はあなたを求める。
神に、命の神に、わたしの魂は渇く。
い つ御前に出て
　神の御顔を仰ぐことができるのか。
昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。
人は絶え間なく言う
「お前の神はどこにいる」と。

わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす
喜び歌い感謝をささげる声の中を
　　祭りに集う人の群れと共に進み
神の家に入り、ひれ伏したことを。

　なぜうなだれるのか、わたしの魂よ
　なぜ呻くのか。
　神を待ち望め。
　わたしはなお、告白しよう
　「御顔こそ、わたしの救い」と。
　わたしの神よ。

わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。
ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から
あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて
深淵は深淵に呼ばわり
砕け散るあなたの波はわたしを超えて行く。

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り
夜、主の歌がわたしと共にある

Tiefe und dort eine Tiefe brausen; alle deine Wasserrwogen und Wellen gehn über mich.

Der Herr hat des Tages verheißen seine Güte, und des Nachts singe ich zu ihm und bete zu dem Gotte seines Lebens.

Was betrübst du dich, meine Seele und bist so unruhig in mir ?

Harre auf Gott ! Denn ich werde ihm noch danken, daß er meines Angesichts Hilfe und mein Gott ist.

Preis sei dem Herrn, dem Gott Israels, von nun an bis in Ewigkeit.

わたしの命の神への祈りが。

わたしの岩、わたしの神に言おう。
「なぜ、わたしをお忘れになったのか。
なぜ、わたしは敵に虐げられ
　　嘆きつつ歩くのか。」
わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き
絶え間なく嘲って言う
「お前の神はどこにいる」と。
なぜうなだれるのか、わたしの魂
なぜ呻くのか。
神を待ち望め。
わたしはなお、告白しよう
「御顔こそ、わたしの救い」と。
わたしの神よ。　（新共同訳新約聖書より引用）

注：メンデルスゾーンの作曲では詩篇の一部が変更されている。

ロジェワーグナー合唱曲集より

ローレライ

もとの意味は「妖精の岩」。ドイツ西部ライン川中流右岸（フランクフルトの西約７０Km）に突き出た１３２mの岩山。昔は船の難所でこのような物語詩がつくられ、この曲で世界にその名を知られる。川下りの観光船からはここの他、渓谷の古城・教会・町並み・ブドウ畑の丘など中世ドイツさながらの美しい光景が展開する。

（B．長尾）

春の日の花と輝く

春の日は花と輝きの詞で始まるこの曲は日本では堀内敬三氏の訳で良く知られています。この曲の内容は「あなたの美しさは色あせたが、私の愛は変わることはない。」ですが、特に詞のなかの「我が心は変わる日なく御身をば慕いて」の部分にその心がこめられているような気がします。人生の半ばを過ぎ50代に足を踏み入れようとしている私には色々と考えさせる歌詞です。こに歌詞のような誠実さをもって生きて行けるよう努力したいと思っています。本日の歌詞は原語ですが、この歌詞をかみしめお聞きください。

（T．草野）

アフトン川の流れ

スコットランド南西部、グラスゴーの町の南方に Afton Water と言う名の川がある。定かではないが、これがこの歌のアフトン川かと思われる。高い丘に取りまかれた狭く深い谷間の小屋で、愛する乙女メアリーがまどろんでいる、小鳥たちよ、そのさえずりでメアリーの眠りを妨げないでくれ。羊飼いの若者の優しい気持ちがアフトンの水の流れにのせて歌われる。

（B．井上）

アニー・ローリー

アニー・ローリーは実在の女性で、1862年スコットランド生まれ。絶世の美女といわれ、いったんは恋人のウイリアム・ダグラスと愛を誓ったが、結局お金持ちの別人と結婚してしまった。あの マックスウェルトンの丘で、あの時アニーは確かに約束してくれたのに‥‥、ウイリアムが切々たる想いを歌にして、アニーと共に音楽史に名を残すこととなった。

（A．井上）

レクイエム　　三木　稔作曲

三木稔先生からこの演奏会にお言葉を寄せていただきました。

３３年目のレクイエム

三木　稔

戦中を知る私にとっては、太平洋地域に散った巨大なさまよえる魂たちに安息を、と祈り続けることは生きている間の自分の義務だと考えている。
1963年のこの《レクイエム》に続き81年には、二十絃箏と邦楽器群のために《コンチェルト・レクイエム》を書いた。
演奏する側にも、逝ける人への思いを日本語で歌い、日本の楽器でも奏でられる《レクイエム》があってもいいのではなかろうか。「楽しむ」ことが全てで、暗いものを一切避ける現世天国の日本なのに、幸か不幸か、この二つの《レクイエム》は、それぞれ度々の上演チャンスに深く人々の胸をゆすり続けて来た。哀悼の情を持ちつつも、歌うこと弾くこと、そして聞くことに一種の楽しさを付加できているのだとすれば作曲者冥利に尽きる。
ところでこのレクイエムは、南太平洋マンガイヤ島の素朴で力のある葬送の詩に触発されて作曲したが、33年間方々で演奏されたにも拘わらず、そのことを重要視して機関紙などで掘り下げたのは、寡聞にして今回が初めてである。欧米にしか向いていなかった合唱界にも、明らかに変化のときがきたのかと興味がある。
大森さんというすばらしい指揮者に導かれる宝混の好演は確信しているが、音楽での達成とは別に、昨年の震災の犠牲者の霊安かれと歌う方も多かろう。その地その時に《レクイエム》が生かされることは、それもまた作曲者のひそかな願い。

このレクイエムの出版に際して寄せられた「作曲者のことば」によると、三木稔氏は、芸大の学生時代、神田の古書店で、この曲の題材となったポリネシア・マンガイア島住民の「ヴェラを悼む葬送の歌」の原詩をみつけ、「率直にレクイエムとして表現しよう」と考えた。若き日の三木氏をそのように感動させた詩とはどのようなものなのか、幸い宝塚混声の団員の一人が学生時代学んだ史学のテキストの中に、おそらくそれと覚しき詩があったので、全文を以下に転載する。あわせて、このテキストの著者の書かれた解説ならびにマンガイア島の位置を示した略図も引用させていただいた。
原詩を読み進んでいくにつれて、私たちの意識の深層には精霊の世界との交感の遠い記憶が眠っているのかも知れないと思わされる。その記憶を揺さぶり起こすかのように呼びかけてくる言葉のただならぬ力をそのままに、歌に表わすことができればと願う。　　(B. 井上)

……　大林　太良氏「葬制の起源」より引用　……

これはヴェラの挽歌である。ヴェラは南ポリネシアのマンガイア島の酋長の甥であった。彼が1770年頃死んだとき、はなやかな葬儀が催され、この挽歌がうたわれた。
この挽歌は、ヴェラの精霊が、他の精霊たちの一群を島のまわりをぐるりと案内し、海を越えて精霊の国であるあの世におもむくさまを描き出している。この哀悼の精霊たちの一群を追うのは、死者の父が先導する親族や友人たちだ。精霊たちは、しばしば、道中の疲れをいやすために足をとめる。鋭い石や岩で足をいためたからだ。‥‥悲劇的な合唱と独吟の対話のうちに、突如として挽歌の途中の合唱がヴェラとしばしのあいだ同一となり、死者に発言の機会を与えて、心をゆさぶるような哀悼の意を表現している。

（独吟）　聞こえるかヴェラ、潮騒の音が？
あの小さなパンダヌスの木の彼方の、大岩のうえで飛び散る波の音だ――
さあ、お別れの時が来た！
（合唱）　おれたちの着物は喪服に花だ。
（独吟）　さあ行けあそこの平らな岩まで、そこで順風（おいて）の来るのを待て、

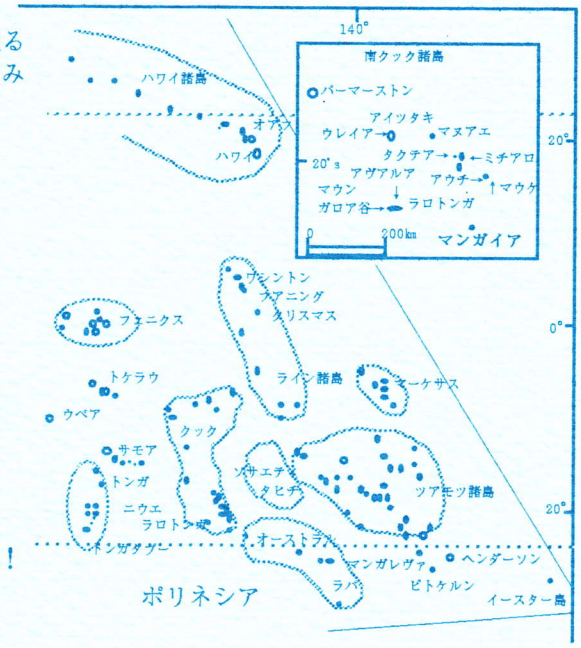
おまえを海の向こうに渡す風を、
心配そうにおまえの親父（おやじ）さんがそこでこちらを見ている——
（合唱）　おまえがつれて行く別離の精霊たちを。
Ⅰ（独吟）　聞えるか、愛するヴェラよ、
（合唱）　海の音楽が？　　おまえは哀れな旅人、もうあんな所まで——
（独吟）　ああ、あそこに行く——　　もう精霊の国に向かっている。
大口あいた墓穴がそこへの通路だ——
さあ、おまえたち友人よ、お別れの時が来た！
（合唱）　おれたちの着物は喪服に花だ。
Ⅱ（独吟）　おれは眼をうつして、
（合唱）　ほかの陸地をながめよう。
（ここで合唱はヴェラと同一になる）
ほかの場所でおれの精霊が安まるように。
ここでは石はぐらぐらし、おまけに断崖のへりときている——
（独吟）　入口には——
（合唱）　この深く暗黒の断崖！
おれの道は海に近いあのまっ黒な岸壁の上を走っている。
でこぼこの切り立った岩の上を、
このひ弱な精霊の群れをおれはつれて行く。
おれたちをここまで追いやるものは何だ？　　おれたちは待とう
首を長くして待っていたあの
（独吟）　南東（みなみひがし）の
（合唱）　風、　それがおれたちを吹いてこの広い海を渡してくれる。
あちこちとおれたちはさ迷った。
潮に洗われた岩の上も転々と跳んで——
でこぼこな岩を越えておれたちは来た。
幽暗の気に圧（お）されておれたちはすわり、そして泣く。
（独吟）　おお、涙にみちた一行、それを引きつれるのは、おおヴェラ、おまえか！
時おりかかる湿っぽい霧のヴェールが、内陸の高山を視野からかくし、
ときには潮の飛沫（しぶき）が吹き付ける——
さあ、おまえたち友人よ、お別れの時がきた！
（合唱）　おれたちの着物は喪服に花だ。
Ⅲ（独吟）　急げや急げ
（合唱）　船出のために。　気をつけろ、足をふみはずすな。
（独吟）　あれが船着き場だ。
（合唱）　その入り口はなかなか見つからない。　おや、あれはおれの親父（おやじ）だ。
（独吟）　親父はおれたちを見まもっている。　日は沈む、——も少し待とう。
（合唱）　岩道でおれたちは足を痛めた。　あれが陰気な洞窟ラウバだ。　ゆっくり歩かせてくれ
おれたちは友を失った亡霊だが、道の半分までやって来た。
見ろ東を——、見ろ西を——！　太陽の沈むのを見ろ！
（独吟）　ああ、おまえの親父はおれたちのすぐあとを追いかけ、
おれたちに引き返せと頼む。　ここでちょっと待たせてくれ。——
さあ、おまえたち友だちよ、お別れの時が来た！
（合唱）　おれたちの着物は喪服に花だ。
Ⅳ（独吟）　おまえの足は、おおヴェラ、
（合唱）　おいしげる蔓草（つるくさ）にからまれた。
おまえ、精霊の国にはいる用意はいいか？　いまこそ
（独吟）　泡だち沸る（たぎる）海原をこえて、
（合唱）　行こうとするのか？
現身（うつそみ）のない精霊のお気に入りの場所、
パンダヌスの林の間を縫って、

（独吟）　平らな入り江は潮に洗われ、
コオロギも鳴いて、おまえが通る
磯べの叢林（しげみ）の径（こみち）を案内する。
死者の精霊のさ迷う径だ。
おおヴェラ、
ひるがえる髪を洗え！
――ああ朝の光よ、
おれに新しい生命をくれ！
さあ、おまえたち友だちよ、
お別れの時が来た！

V（独吟）　偉大なる国王の息子！
（合唱）　恵まれたやつだ、おまえは、
天からの順風（おいて）に乗って、この浜に運ばれた。
では、さようなら
――かえっておいで！
わが家の神様、しばしとどまれ！

（独吟）　甘い香の花の芽で飾られ、
佳（よ）い匂いのする葉も
添えた！
さあ、おまえたち友だちよ、
お別れの時が来た！

（合唱）　おれたちの着物は喪服に花だ。



プログラム

詩編　　メンデルスゾーン作曲

Der.42Psalm

指揮　大森地塩
ピアノ　國井美佐
ソプラノ　門田敦子

ロジェ・ワグナー合唱曲集より

ローレライ
春の日の花と輝く
アフトン川の流れ
アニー・ローリー

指揮　大森地塩
ピアノ　村田朋子
テナー　草野正弘

休憩

レクイエム　　三木　稔作曲

指揮　大森地塩
ピアノ　山本京子
テナー　中川裕文
バリトン　井上喜光

ごあいさつ

本日は、私ども宝塚混声合唱団の音楽会へお越し頂きまして誠にありがとうございます。

今回は、メインステージに三木稔作曲のレクイエムを歌います。私どもにとって、レクイエムといえばフォーレやモーツアルトなど西洋の曲がまず思い浮かびますが、そのような西洋音楽の世界と少なからず異なる曲想のレクイエムを歌うことは、たいへん刺激的な体験でありました。曲は技術的にも難かしく、このため臨時練習も何回となく重ねました。また、9月には三木稔先生をお招きして直接ご指導いただきました。言葉の力が直截に胸に迫ってくるこの鎮魂歌を、先の震災で彼岸へ渡った多くの魂のため、また、三木先生のお言葉を借りれば、「現代の恐るべき数々の殺戮によって、天寿を全うせず昇天した魂」に捧げたいと存じます。

さて、宝塚混声は、ながらく活動を支えていた市民音楽祭が終息した今、自らを鼓舞する新たな目標を持つべく模索を続けています。顧みますと、私どもが好きな歌を歌えるのも、ご来場の皆様方を始め日頃から私どもを支えて下さる数多くの方々のご好意の賜物です。歌わせていただいているとの感謝のこころを確かめ直すことから新しい道が始まる、ここにこそ私どもの目指すべき方向があるのではないか、との朧気な予感を覚えます。音楽を愛する皆様方に、私どもの今後の進み方を暖かく見守っていただきたいと存じます。

平成８年１０月　　宝塚混声合唱団